

17

0

R

U

V

1996

3

月刊 フォーラム

月刊フォーラム◎第7巻3月号  
1996年3月1日発行(毎月1日発行)通巻68号  
1991年2月8日 第三種郵便物認可

# フォーラム

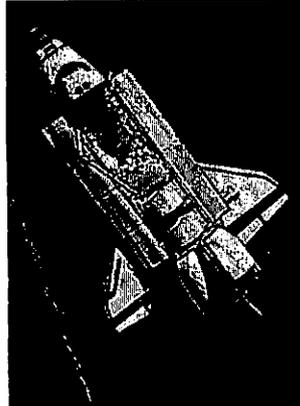
21世紀へ架橋する知の冒険



◎特集I◎ 『仕事』の発見



「どう働くか」以前に「どう生きるか」 浅野富美枝  
 「仕事」を問う 渡池弘子  
 —「仕事」の現場から—  
 愚者の楽園 有江大介  
 —「アルバイト・コンプレックス」を越えて—  
 アポロ13号と《仕事》 細谷 実  
 働けば自由になれるか 柴田隆行



FORUM 月刊フォーラム

◎特集I◎ 『仕事』の発見

1996 3 社会評論社

●特集Ⅰ●

# 「仕事」の発見

「どう働くか」「以前に」「どう生きるか」 浅野富美枝

6

「仕事」を問う 鴻池弘子

18

「起業」の現場から

愚者の楽園 有江大介

20

〈アルバイト・コンプレックス〉を越えて

アポロ二三号と《仕事》 細谷 実

27

働けば自由になれるか 柴田隆行

34

●特集Ⅱ●

# いかなる時代が始まったのか

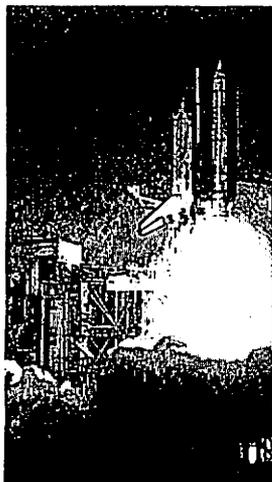
第6回フォーラム全体集会

21世紀の原理を創り出そう 伊藤成彦

42

生命と暮らしに係わるせめぎあい 金井淑子

44



市民・共生、そしてアジアの時代 山口 定 53

第三極の立場から状況をどうみるか 和田春樹 52

討論——エリートピア性と現実性

吉川勇一・太田昌国・加藤哲郎・和田春樹・山口 定・金井淑子 70

地位協定・日米安保再定義・PKO派兵の相関性 池田五律 84

——沖縄基地問題から「反安保」を考える

## 第6回フォーラム 分科会報告

〔第1分科会〕 新しい社会システムの構想 小池和彦 94

〔第2分科会〕 世紀末資本主義の変貌 長尾克子 95

〔第3分科会〕 生命の倫理とテクノロジー 中野達彦 97

〔第4分科会〕 女性労働と世界システム 池田祥子 98

〔第5分科会〕 成長するアジアの光と影 富永さとる 100

〔第6分科会〕 20世紀の終焉にあたって 高橋順一 101

〔第7分科会〕 新左翼四〇年の総括へ 志摩玲介 103

〔第8分科会〕 「情報化」する大学 宮崎俊郎 105

〔第9分科会〕 やっぱり地域の学校だ 柴崎 律 107

〔第10分科会〕 天皇と慰霊 野毛 一起 109

〔第11分科会〕 オウム真理教と市民社会 石塚省二 110

〔いんふおめいしょん〕 112



# 討論——ユートピア性と現実性

別の原理に立つことが重要である

【吉川勇二】 私は「市民の意見三〇の会・東京」のニュース上で、和田春樹さんと討論を続けています。まず和田さんがお書きになった「朝鮮戦争」という岩波から出た本の書評をこの春に書きました。書評と言いますが、本のごく一部、朝鮮戦争下における日本の社会党の方針や平和問題談話会の知識人の声明などについての評価に異論を申し立てたのでした。和田さんからそれに対する反論があり、私が見て、それへの反論をつい最近に書きました。その三回のやり取りがお手元に配られた資料です。そういうことがあったので討論者に指名されたのだろうと思います。

私が申し上げたいことは、そこに書いてありまして、お読みいただけたらと思います。和田さんから今日は直接に私の意見への言及はありませんでしたが、私が三度目で引用しました

「日本通史」の論文の中で和田さんの見解、つまり白衛隊と憲法の間の乖離をどうやって埋めるかについての四つの選択の問題を、和田さんはもう一度ここで繰り返されましたし、またベトナム戦争のことにも議論の中で触れられたのですが、そこで脱走兵援助の問題や米軍解体の運動にも言及されましたから、当然私の批判を意識されて話をされたのだと、私は受け取りました。

先ほど伊藤成彦さんが休憩時間中に「吉川さん、三極でも四極でもない、南極か北極でどうだい」という話をされた（笑い）。これは冗談ですが、先ほどから山口さんや和田さんの話を聞いていると、私の考えは保守的あるいは頑固と言えるかもしれない。湾岸戦争の時に、私どもは「ニューヨーク・タイムズ」に「武力によって戦争は解決できない」という全面広告を載せました。その後から特に、私は、状況が混沌として訳が分からなくなったら原則に立ち返り、原則に立った運動を展

【特集Ⅱ】  
いかなる時代が  
始まったのか？



吉川勇一

開する以外にないと言いつつ、和田さんへの批判も、その立場から行なっているつもりです。でも、その批判の内容は資料として配られていますから、そちらに譲ることにします。ベ平連で活動した仲間で、鶴見良行さんという方がおられました。全く新しい立場からアジア学の研究をされていましたが、去年、亡くなりました。鶴見さんを偲ぶ会が十一月二三日にありまして、そこで私は次のような話をしました。昨年のあるシンポジウムで、天野恵一さんから、一九六〇年代末から七〇年代にかけて日本各地で全共闘あるいは新左翼党派によって学園闘争をはじめとして実力闘争が行われたが、その時代にいわゆる護憲派あるいは非暴力運動派からの強い声が聞こえなかったのは何故なのかという提起がされたことがあります。私はかなり重大な問題提起だと受け止めて、それと関連しながら鶴見さんの六〇年代後半、ベトナム反戦の初期の時期の本を読み

返してみました。そして、あの時期に何故もつと鶴見さんの主張されたことを運動が実体化できなかったのかといささか慚愧の念にかられたという報告を、偲ぶ会でしたわけです。

先程、和田さんは脱走兵援助の運動や米軍解体の運動は特筆すべき運動ではあったが、しかし、それがベトナムの国家の側に立つことであり、ひいてはそれを支援していたソ連・中国、つまり冷戦の一方の側に利用されることになった以上、それは必然的に非暴力運動あるいは市民的不服従の運動として展開することには無理があつたのではないかとおっしゃいました。

私は、あの運動はそういうものとして展開しうる大事な芽ははらんでいたと思います。軍隊から脱走するということはさらに国家を離脱するということでしたが、鶴見さんはそれ以前から日本国民であることを断念するということを強く主張されてきました。鶴見さんは、生まれがアメリカ人なんです。そこで彼は戦後、国籍を選び取ることができました。アメリカ人になることもできたんですが、彼は日本人になることを選んだ人なんです。その彼がベトナム反戦運動の中で「日本国民としての断念」を主張するようになるのですね。そして、それと同時に、これからの反戦運動は、非暴力・非武装の運動以外にないと、六〇年代後半に指摘しています。私はその運動は可能性としては大いにあつたのに、それを十分に生かし切れなかったのだと思つています。冷戦の終わった今こそ、その原理をもう一回くみ取るべきだと思つてます。

鶴見さんは「日本国民としての断念」という論文の中で、ベ

トナム戦争初期のアメリカ知識人の政治へのコミットについてかなり深く論じています。その中で、何でも反対、原理に立つて反対を言っていて済むわけではなく、現実の政策をどうするのかを言わない反対は無責任だと当時アメリカの中で強く主張されていた代案主義、現実的なオルタナティブが必要だという議論を取り上げています。国家の政策は多岐にわたりますから、国家がすべての情報を十分に知っていることなどできない。そこで専門の知識人の協力を必要とします。その時に国家は、知識人の知識や知性を国家の全体的な政策の修正に使うことは絶対にしません。国家は自らが決めた政策を合理化し、そしてそれを能率的に進めるためにのみ部分的に知識人を利用するだけです。鶴見さんは、こうしたアメリカの知識人の政治へのかわり方を強く批判したのでした。和田さんが先ほどヴォーゲルの話をされましたが、今でも同じことが、もっと大きな規模で続いているんだろうな、と私は受け取りました。そして和田さんたちが行っている活動——善意であることをまったく疑いませんけれど——、例えば平和基本法の提案、あるいは最近の従軍慰安婦の問題に関する国民基金の提案についても、国家によって知識人が部分的に利用される危惧を、私は抱かざるを得ません。

オルタナティブということは、違った意味でここ数年いわれられてきています。例えば、アジア太平洋資料センターが呼びかけて運動を起こされてきたP P 21の運動は、ベトナム反戦の初期に言われた代案主義とは全く違う。山口さんは「共生」という

言葉を度々使われましたが、共生に基づいた民衆どうしの結びつきの中で新しい展望を別の原理に立って組み立てようというオルタナティブです。明確な原理に基づいたオルタナティブは必要だと思いますけれど、いま実行可能な現実的政策はどうあるべきかということだけのコミットの仕方となると、非常に危険だと思っています。

戦後五〇年のこの一年で、問題が全部出つくしたように思います。ありとあらゆる問題が出た。「市民の意見三〇の会」が、今年出た主要な市民運動の運動体の五〇年に当たったのいろんな宣言やアピールを収録したものをつい最近資料集として刊行しました（「戦後五〇年」あらためて不戦でいこう！）社会評論社）。おまけに村山首相の談話や天皇の「おことば」や右翼の決議まで載っていますが、ここには私たちが今かかえており、解決を迫られている問題が全部出そろっていると思います。今日のフォーラムは「いかなる時代が始まったのか」というテーマですが、私は戦後五一年が始まる、つまり戦後の後半世紀を新しい視点に立ってもう一度やり直さなければならぬ、そういう時代に入ったと思います。問題が非常に明瞭に出ているだけに、後から考えてこうすればよかった、ああすればよかったと繰り返さずに新たな運動が展開できるのではないかと。これからは若い人々に期待するほかないんだけど、そういうことが可能だと思います。山口さんが新しい市民運動は政策提案能力を持たなければならないとおっしゃいましたが、しかし、その政策提案能力は根本的な原理の違った政策でなければならぬ

と思います。

## ユートピア性と現実性

【太田昌国】 ここ数年の世界政治的な問題としては、ひとつの時代が終わったという印象を持っています。それは現実には存在していた「社会主義体制」の崩壊状況を見て出てくる思いです。また広く文明的な私たちとしては、環境問題などを含めて近代の極限としてのわれわれが生きている産業社会がどん詰まりにきていると言う意味でも、ひとつの時代が終わり、新しい時代が用意されなければならぬと考えてきました。そういう意味では、ここ六、七年間の関心は、このような現代に行き着いた「近代」をどういうふうに総括できるのか、それに基づいてどんな新しい社会を構想できるのかということでした。その時に「近代」を考え直すためのいくつかの軸があると思うのですが、その一つの軸が今日、金井さんが話された性差、ジェンダーの問題であると思います。二つ目の軸は、山口さんが言われた「共生」という問題です。異民族、異文化の問題に現れている近代という姿をどのようにとらえ直すのか、ということが非常に大きな問題だと思ってきました。

ただ、「共生」という問題ですが、近代とは、ヨーロッパの国々、一番遅くは一九世紀後半からの日本のような国家が、他民族を支配し侵略戦争を行ったという時代と同時代です。そのような時代を数世紀経て現在がある以上、この現在においてわれわれのような植民地をもち侵略戦争を行った国に生きる人間

が、もし共生ということを語りうるとすれば、どのような条件で語りうるのか。こういう前提が厳しくつけられねば、われわれの社会では共生という言葉を使うことができないだろうと、僕自身は考えています。

最後に三番目の発言者の和田さんの提起に関わりますが、和田さんは、この数年間論文や座談会で言われてきたことと若干異なるニュアンス——修正とは言いませんが——で、他者をおんばかった言い方をされました。この間は「第三極」に自分を純化して戦闘的な発言をされましたが、「第四極」に位置する人間にもひじょうに優しい言葉をかけてくれまして、僕は第四極だとずっと白覚しながらここ三年間和田さんの文章を読んできてたものですから、先程の南極・北極の話ではないですが、これは第五極、第六極を設定しなければ無理かな（笑い）という気さえしました。まあ、これは冗談ですが、とにかくど



太田昌国

んな少数派の場にも来られて討論を行おうとする和田さんには、敬意を表したいと思います。

和田さんが第四極をどういうふうに設定されているかという点、ユートピア的な原則から現実を批判してゆく立場であると規定され、その上でこの第四極は絶対に必要なんだと言われました。この問題が有効に討論されるためには、和田さん自身の中にこの第三極と四極の間の揺れが——これは僕自身にもある揺れですが——あることを認められることが必要だと指摘しておきたいと思います。

僕が一番大きな問題を感じるの、いわゆる国民基金の問題に関して、これはすでに国民投票的な性格を持っているのだから、もしこれに失敗したら右翼的な言論の台頭に負けるのだという今日の和田さんの主張です。十一月六日に戦後補償をめぐって公開市民討論会がおこなわれた時に、同じことを和田さんは言われました。僕はこの考え方に危惧を持ったので質問しようとしたところ、僕の親しい友人が同じ危惧を和田さんに直接表明しました。もし和田さんが第三極の立場から、村山政権が推し進めている国民基金に批判的な協力をを行うということを、僕がよしんば認めたとしても、和田さんが、これは国民投票的な性格をすでに持つてしまったというふうには後から意味付与するのは非常に勝手な立場ではないかと思えます。日本政府が国家の意志において国家の立場を十分に計算して選びながら、官僚の資料に基づいて行っていることが明白な国民基金構想なわけですから、これにもし自分たちが協力しないで惨めな結果に

なつたら大変なことになるぞというのは、ひじょうに本末転倒的な言い方です。このような言い方が何故和田さんのような立場の方から何度も言われなければならないのか、ということが僕にはよく分かりません。

それから、北方四島の問題が言われました。領土問題を棚上げにしてロシアと交渉すべきである、という和田さんの主張は、僕がこの間考えてきていることとほぼ同じです。僕は、北方領土の問題が日本ナショナリズムの立場からの領土回復要求としてなされることには反対ですし、基本的には北方四島をアイヌを含めたシベリア北方少数民族民族による国家の枠を外した共同統治の場としていく、それができれば国家なき新しい未来社会にとつてのひとつのモデルケースとなるだろうとこの間主張してきました。僕は、この主張が現在の日本の状況とロシアの状況、双方のナショナリズムの状況を考えると極めて——これは悪い意味ではなくて——ユートピア的な考え方であると自覚しています。同じような主張をお持ちらしい和田さんが、なぜこの件では第三極の立場からする現実性のあるプランだと主張されるのか。やはり和田さん自身が問題によってユートピア性と現実性を使い分けられているのではないかと感じました。

### 「極端の時代」を越えて

【加藤哲郎】 昨年の全体集会の問題提起者は武者小路公秀さんでした。武者小路さんは、グラムシは機動戦から陣地戦へという問題設定をしたけれども、今や陣地戦から情報戦・諜報戦の

段階に入ったという問題提起をされました。そこで、おそらく情報戦を意識したのだろうと思いますが、いかなる時代が始まったのか、二一世紀のキーワードは何かという問題設定がなされています。金井さんからは「フェミニズム」、山口さんから「共生」、和田さんの場合は「共同の家」、さらに「第三極」「第四極」というキーワードが、ここにいる人たちにはかなり刺激的ななかたちで、問題提起されました。

「共生」なり「共同の家」が問題になるというのは、フォーラム90sにとつては、ある意味では当たり前のことかもしれません。と申しますのは、フォーラム90sの設立総会の時に、私は廣松さんと一緒に問題提起をさせられたのですが、その時は多分廣松さんが第四の極を代表して、私が今日の和田さんのように第三極を代表せよということだったんだろうと思うんです。今日は、私は第三極で言ってもいいんですが、和田さんとの関係で言いますと第四極に近い立場に現在ありますので、その観点で発言させていただきます。

ユートピアをかたる時に二〇世紀の情報戦の流れを見てみますと、前衛党によるプロレタリア独裁から始まりまして、労農同盟というブロックが出てきました、統一戦線というフロントが出てきます。それから人民戦線とか共同戦線というふうなものが出てくる。ある時期から平和共存が出てきました、「自由・平等」に対する「友愛」という原理が再生してきました。「友愛」というのは兄弟愛 (Fraternity) の訳であるから、これは差別語だというフェミニズムの問題提起があつて、「連帯」

(solidarity) ということになった。この「連帯」と「共生」とはちょっと違って、まして、「連帯」は明らかに同質のもの、ないしは同じ方向を向いたものまとまりというイメージが強いのですが、「共生」の原理、あるいは「共同の家」の原理というのは、異質なものを含みこむ、レベルの違うものをも共存させるというイメージがあるのだろうと思います。

こういう観点から、最初の金井さんの問題提起との関連で申しますと、日本の社会運動は、戦後五〇年だけをとつてみましても、戦後すぐの時期、そして六〇年安保闘争の時期、それから六八年から七〇年の大学紛争にいたる時期まで、実はフェミニズムの問題提起をほとんど受け入れることができないままできて、七〇年代以降になってようやく受け入れてきたわけですから、経済企画庁の「平成七年版国民生活白書」で「戦後五〇年の自分史」という非常に面白い分析がされておりますけど、この中



加藤哲郎

で私にとって衝撃的だったのは、「もつとも専業主婦化が進んだのは団塊の世代である」という指摘です。実は六八年に管理社会に対する問題提起を行った人々が、金井さんの言われる企業中心管理型ライフスタイルの原型を作ってきたという問題を真剣に考えてみる必要があると思います。

次に、山口さんの話について言いますと、「共生」の原理についての話は示唆的でありまして、とりわけ共生と寛容の関係という問題は、私もひじょうに共感しました。ただ、生物学の共生 (symbiosis) ではなくて現代日本語としての共生 (living together) の方がよいという場合の論理についてですが、symbiosis だと閉じられたもの (closed) になるからオープンなものにするためには living together の方がいいというお話をされました。私は、むしろ共生という原理は、それぞれのシステムは相対的に閉じられていることを前提にして、その閉じられた異質のものをどうやって結びつけばいいかという問題だと思います。そのように考えた方が、実際の地球社会における共生を考えた場合には有益なんではないかと思ひまして、あえて共生の生物学的な起源の方を重視する論理構成を考えたいほうがいとコメントさせていただきます。

ベルリンの壁の崩壊の時に、東欧でフォーラムという革命のスタイルがとられて、そのフォーラムに学ぼうというのがフォーラム90sの趣旨であったのですが、実は設立総会の時に私は「フォーラムと円卓会議による革命」という提起をしました。つまり、フォーラムというのは、単に討論の広場であるという

だけでなく、そのフォーラムの場は円卓会議という形をとる——今日は高い壇上が上がっていますが——、要するに上座がどこにあるのか分からないかたちで討論がなされる仕方にもうひとつの意義があるわけです。そういう意味でいえば、一、二、三、四という極に分けるのは、ある意味では邪道でありまして、ぐるっと回って行きますと、いつのまにか四だと思っていたのが三であったり、三だと思つたら五とか七だったというふうなある種のキャンブル性を秘めた世界に、共生の原理、ないしフォーラムの原理はなってくるという問題があるわけです。

和田さんのお話は、この場が第四極の人たちが中心だということをお前提になさって、第三極の立場から挑発するという構成になっており、刺激的でした。しかし、私はユートピア的・原理的に考えた場合には、「世界戦争の時代から世界経済の時代へ」というふうに時代認識を設定してしまうと、和田さんのおっしゃる意味での世界経済の時代がまだまだ二一世紀まで続くということになり、危険ではないかと思ひます。強いてスローガン化するとなれば、私は「エコロジー」(生態学)と「エルゴロジー」(人類動態学)の視点を主張しております。

その詳しい中身は省略いたしますが、たとえばイギリスの歴史家E・J・ホブムボーズは、一九世紀を「革命の時代」「資本の時代」「帝国の時代」と総括してきましたが、二〇世紀を総括した本を出しまして、「極端の時代」と規定しました。つまり「長い一九世紀」は三巻の本で描いたんですが、「短い二〇世紀」は一冊の本で凝縮して「極端」(extreme)と一語

で片付けることができるような時代だったというわけです。

extreme には、たしかに人類史上類を見ないほどに人命を殺戮しつくした世界戦争という意味もありますが、同時に人類史の中であらゆるものを商品化し、それを極端に凝縮された時間と空間の中に詰めこむほど物質的な富を作ってきた。逆に言えば自然を極度に搾取してきた世界経済の時代でもあったという意味が含まれているわけです。その観点から第四極の立場で言えば、どうやって労働中心主義、人間中心主義、あるいは経済中心主義から逃れるか、いいかえると溢れるばかりの富によって人間は豊かになるといふユートピアからどのように逃れるかということが、二一世紀への課題ではないかと私は思っています。

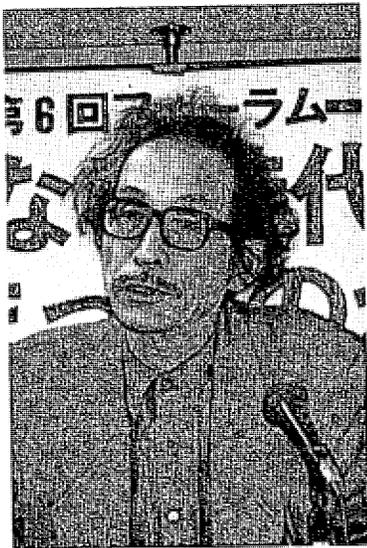
### 第三極と第四極の協力こそ必要

【和田春樹】 第三極、第四極というのは、たまたま名付けているわけです。太田さんは、和田の中にも二つの極の間での揺らぎがあるのではないかと、あるいは和田の議論は少し揺らいでいるのではないかと言われましたが、「歴史としての社会主義」を書いた時に、現代史の第三期を招来するために新しいユートピアが必要だというのが、私の結論でした。ですから、私もユートピアを考えておりますが、当面の問題としては、現在の戦後状況の中でやはり現実的に実現しうるオルタナティブを求めていかななくてはならない、と思っています。

国富さんの質問されたこと（注）こそ問題点でして、第三極を私は求めておりますが、第三極ができるかどうかというの

は、みんながその気になるかならないかにかかっている問題です。今までいろんな運動をしてきた人は第四極の方向に向かっていることですが、第三極では元気が出ないということ、よく分かっていることです。にもかかわらず、第三極の必要性は、考え方の問題として見れば提示されている問題だと、私は思っております。

北方領土問題について、アイヌも加えた共同統治にしたらどうか、これはユートピア的だと思っていると、太田さんはおっしゃれましたが、私はこれは第四極的だと思います。北方領土問題について一九八六年に出しました私の案は、ハボマイ、シコタンは日本領、クナシリ、エトロフはソ連領と認めて、しかし双方がそれを出し合って共同統治し、非軍事化して資源を保護しながら共同で開発するというものでした。私は、それが現実には選択可能だと考えております。もちろん、現在のところ



和田春樹

その案が採用される状況はありませんが、このような考え方を取り入れなければ今の段階では問題解決はできないと思っております。

国民基金についてですが、それが国民投票だと言ったことについて太田さんが批判をお持ちだということは分かりますが、私は、新聞で報道を読んだ時にこれは国民投票になるなという予感を抱きました。だから、これは避けて通れないものと思っただんですが、先ず国民基金の結果を国民投票と受け取って、お前たちは敗北したんだと宣言してきたのは右翼の側でした。これだけしかお金が集まらないのは、国民が謝罪を拒否しているという総意が示されたことだと思ひ知れ、それが嫌なら自分たちで一億円ずつ出せと言ってきたのが、北方領土問題で私にいつも手紙を送ってきた右翼の人でした。それをそのままにしているかというのが、この前に申したことでした。ですから、私は一方的に国民投票的なものだとぞと言って、参加しなければいけません。

吉川さんのおっしゃった脱走兵の問題について申しますと、私は脱走兵の援助は戦後の運動の中でも高く評価できる運動だと思っております。ただ、先ほど私が申したことは、脱走兵の援助はたしかに個人の非暴力的の信念に基づいた行為であります。ベトナム戦争全体の状況の中で見ると、それは、ベトナムの地でベトナム人がアメリカ軍と武器を取って戦っていることと結び付いて日本の地で行われた運動であったということですから、非暴力抵抗の原理だけでベトナム戦争を終わらせるこ

とができたかという、歴史家としては疑問だと思います。世界中で反戦市民運動が高まったことは非常に大きなことでしたが、アメリカ軍を押し戻した力は、やはりベトナム人の武装闘争にあったということは否定できない。その意味でベトナム人の戦争は何だったか、正義の戦争であったのではないかという問題がわれわれの前にある。ですから、ベトナム戦争の時の脱走兵援助の運動から非武装主義を絶対化して戦争を考えていけるかということについて、私は異論があると申しただけです。しかし、これは永遠の問題だと思います。ですから、憲法九条を非武装・非暴力の原理を謳ったものと理解してその主張を世界に広めていく立場がありうると思ひますが、それは第四極的だと思ひます。ですから第三極的に軍縮という道を取っていくことが必要であり、両方あいまって理想に近づいていけると思っております。

### 問題発見能力が求められている

【山口 定】「新しい市民運動」は政策立案能力が必要という私の提起に対して、吉川さんから、政策立案能力といってもその拠って立つ原理によって様々な質のレベルが設定できると指摘されました。先ほどの第三極と第四極の問題にからむと思うのですが、ご指摘の通りです。私どもの大学の政策科学部は、「政策」をキーワードとする学部です。最初に慶応大学、次に中央大学に、それから私どもの大学、今年に入って関西学院大学に設立されまして、どこでも大変な人気です。私どもの学部



山口 定

の場合、学生三〇〇人に対して二年とも一万人を超える応募者があり、競争率三〇倍です。学部設立の趣旨は、国家や企業の担い手を育てるだけでなく、日本の市民社会、一般市民の政策能力のレベルアップに大学が正面から取り組むべきであるということなのです。また、戦後の社会科学が分析と批判で終わっていたのではないか、それが革新勢力の危機の原因の一つではないかという反省もあります。そのことが一定の共感を呼んでいると思います。

しかし、政策科学は、アメリカ流のプラグマチズムではないかという批判がございます。私どもがキーワードとして強調するのは、通常、問題解決能力ということですが、しかし、時代の激動が進んでくる中で、問題解決能力とはあまり言わなくなつた、むしろ問題発見能力と言うようになりました。問題解決能力というのは、六〇年代アメリカの政策科学から導き出された

もので、問題自体がどういふ問題かということは分かっていて、後はそれをどう解くかという技法の問題だというレベルです。しかし、八九年以降の社会主義の崩壊によって、問題自体が所与のものとして、あるいは特定の見方からの認識を前提にして後は手法の問題だというふうには立てられなくなつた。つまり、問題はこういう形であるのかを発見する、立場によって人々の問題意識自体が多様でありますから問題自身の多様性ということを含めて、問題発見能力が重要になる。単なる技術的な解決ではなくて、大きな問題解決ですから構想力が問題になる。問題発見能力と解決のための構想力が問題になると、私は考えております。

第三極・第四極論についてですが、私は、市民派の人々が政党政治の主体として登場しようという大変困難な努力を傾けられておることに敬意を表しますが、果たしてそれでいいのだろうかと疑問に思っています。日本における市民社会の確立という課題は、日本の国民性や歴史からいって大変困難ですが、それを少しでも容易にするための制度改革、制度にいくつかの重要な風穴を開ける運動が重要だと思います。例えば分権化の問題です。地方分権推進基本法が成立しましたが、これが手掛かりになるかどうかは難しいのですが、もう少し意味のある分権化を進める。もう一つは、情報公開です。ナショナルなレベルでの情報公開がなかなかできないが、どこかで風穴を開けなければならぬ。あるいはオンブズマンの導入はすでにあちこちの自治体でやり始めていますが、これをどんどん広げる必要が

ある。さらに、ボランティア、NGOを支援する仕組みを作る  
必要があります。

制度に風穴を開けなければならぬ三つか四つの重要な基本  
的問題に運動の力を集中することが大事であって、国政レベル  
で小さな小さな政党を作ること——それも難しいのですが——  
に最大のエネルギーを費やすというあり方でいいのだろうか。  
絶望的な雰囲気があるとしたら、ナショナルな政治のレベルに  
拘束され過ぎていることから来ているのではないかと、申し上  
げたい。

柴谷さんのご指摘ですが〔注2〕、私も「共生」が日本の専売  
特許ではないと言ったつもりでした。それから、*syndicalism*に  
こだわっているのは古い生物学ではないかと思っていました。が、  
先ほどのご発言はそのことを確認していただきました。

### 日本人中心主義を越える課題への挑戦

〔金井淑子〕 柴谷さんが、フェミニズムの中に女性の身体的与  
件、産む性からの解放を生殖テクノロジーに求めている発想が  
あり、今まさにそれを現実化する動きがあるという私の報告に  
対して、疑問を出されました〔注2〕。いまの社会では、性別役  
割分業を前提にしている限り、女性の社会的自己と身体的与件  
の二律背反はどこまでも付きまとうわけでして、テクノロジー  
が女性の中のそうした二律背反の調整を可能にする条件を作っ  
ていると申し上げたのであって、それを現実に向けようしているも  
のではないということです。

「共生」の問題につきましては、大変興味深く伺いました。  
綿貫礼子さんが、個体間の倫理に対して世代間の倫理という視  
点から共生 (*Symbiosis*) の価値を考えていきたいと発言をさ  
れています。世代間の循環というところまで考え、あるいは持  
続可能な開発という現在のエコロジーの問題意識を踏まえて、  
共生 (*Symbiosis*) を積極的に考えるべきだと思います。

加藤さんが、最も主婦化が進んだのは団塊の世代であるとい  
うことを言われましたが、これに加えて、団塊の世代とは全共  
闘世代ですが、この世代が家父長制をしつかり担った世代であ  
り家父長制が克服されていないことも言っておきたいと思いま  
す。

日本女性学会でも、「フェミニズムと国家」ということでこ  
の間二回ほど大会で議論を続けてきています。私も北京女性会  
議に行きまして元従軍慰安婦の方の告発も聞きましたが、自分  
が国家とどう向き合うのかということ抜きにして、日本のフ  
ェミニストの運動が外に出ていった場面で日本国家に補償を要  
求する運動を作っていくというあり方に若干違和感が残ってい  
ます。なぜかという、原則は国家に責任を取らせるべきです  
——私は国民基金反対の署名に署名するつもりですが——が、  
しかし、私たち自身が五〇年間この問題を放置し、女性たちが  
名乗り出れない状態を放置してきた現実をどう受け止めるかと  
いう問題があるからです。その回路を問わないことには、フェ  
ミニズムはナショナルリズムを乗り越えて女のつながりを作るこ  
とはできないのではないかと思います。



金井淑子

フェミニズムや女性学も市民権を一定程度得る中で、制度化の危機の局面にあります。実際に日の女性やレズビアンから日本の女性学やフェミニズムは日本人中心主義を脱していないことを強く指摘されています。アメリカの女性学は、八〇年代に入るところから黒人解放運動から強い突き上げを受けて新しい段階に入ったんですが、日本の女性学やフェミニズムがようやく自覚的にこの問題を受け止めはじめたのが、現在だろうと思っております。

それから、政策提案型の市民運動に関して危惧を感じる点があります。政策提案能力ということを出口さんの言われたように問題発見のための能力だということを引きちんと受け止めておかないと、ハウツー的なものになったり、ロビー活動化していったり、行政との関係で女性が巻きこまれて利用されていくという動きが沢山あるわけです。その中で盛んに使われるキーワード

ドが「共生」なんです。その共生というのは、セクシズムの問題を不問にして、とにかく男と女が共同して参加していけばよいという傾向に、共生論を流していくものだと感じていますので、私の危惧を述べておきたいと思います。

#### 討論を継続するために

【太田昌国】 和田さんは、戦争責任の問題は国家の問題だが、国家にその責任を取らせることができないまま五〇年間すこしてきたのは、この国家を構成しているわれわれ国民である、結果的に保守政権にブレーキを掛けることしかできずポジティブなものを実現できなかった、という視点でこの間、戦後の平和・革新勢力について総括されてきています。この捉え方の問題は、今後も討論されなければならないと思います。八月十五日に、国民基金の問題で全国紙にあれだけ大きな広告が出たということ、当日に村山談話が発表されて記者会見で天皇の戦争責任を免責したことは、一つのこと、セツトになっていきます。だから、このような形で出されている基金構想に参画することがポジティブなものになるのかどうか、僕は疑問を拭えませんが、この問題をめぐっても僕としてはさらに全体的な討論が広がるようにしたいと願っています。

【吉川勇二】 山口さんが、市民運動が政治レベルで力を注ぐよりは、極端にいえばできることに力を集中した方が良く受け取れるようなことをおっしゃったのですが、私は逆に数年前から市民運動がそういう傾向になっていくことに強い危惧を持っ

ていたのです。むしろ大きな政治状況や課題を取り上げないと、現在の状況は非常に危ないのではないかと思います。なぜならば、国家や政府は大きな問題に取り組まないからです。そういう課題は、先へ先へと延ばす。例えば、フロンガスの規制にしても自動車の排ガス規制にしても沖繩問題の解決にしても、全部先送りで、問題が起こった時だけアタフタする。

戦後責任の問題や賠償の問題をまず取り上げたのは、政府ではありません。市民運動なんです。運動の中で日本の加害者責任を一番最初に論じたのは、一九六六年のベ平連の国際会議の中で小田実さんの報告でした。その時にはほとんど問題にされなかったですが、今では八・一五になれば日本の加害者性というのとはどんな新聞も書くようになりました。私は、大きなことを言ってきたのはむしろ市民運動ではなからうか、問題を発見したのは市民運動ではなからうかと思えます。政府は問題を発見しない、それを隠し、問題解決を先に延ばすことしかしないと、私は強く感じています。

【注1・国富健治さんの会場からの発言】 和田さんが第三極と第四極という話をされ、ご自身は第三極の立場に立つとおっしゃった。その場合、第一極は改憲論を含む保守的な権威主義、第二極が保守・リベラルであると思います。しかし、現実的には第三極に立とうと主観的に思っても、第三極に立つこと自体が今の状況では非常に困難なことなんだと、僕は思うんです。

例えば、社会党が連立政権に入ってから社会党は第三極に

もなりえなかった、ということにはつきりしています。民主・リベラル新党とか言ってますが、主観的には第三極になろうと思っても実際にはどう見ても第三極にさえなりようがないという状況ではないのか。第一極や第二極に対して仮に頭の中で考えて政策的対案を出すことができたとしても、それだけでは第三極にはなりえない。本当に第三極を成立させるためには、よほど大きな民主運動のようなものをつくらなければ第三極自体が成立しえないというのが現実なのではないかと思えます。

【注2・柴谷薫弘さんの会場からの発言】 金井さんの言われた「産む」ということを生殖テクノロジーに委ねる傾向は、経済的にほとんど大部分の人々には不可能なことだと思えます。それが現在のフェミニズムの傾向であったり、企業の中の男と女の和解や調整として出てくるのであれば、問題ではないかと思えます。

山口さんの言われた共生 (living together) には、私も賛成いたします。実は symbiosis というのは古い概念に基づいておりまして、最近のエコロジイはずっと先に進んでいるので、山口さんのおっしゃるような生物学に基づくのでは不十分だと思います。最近分かってきたことは、生態系はある程度の攪乱 (disturbance) があつたときに、最も多様になるということです。多様性 (variety) が対概念で、たくさん生物が共生するということ意味であります。年周期、日周期といろいろありますが、生物は物理的条件の中で周期的に卵から始めるわけで、違つた条件に対してサイクルがまっとうできなければ生物は生き

延びられません。サイクルに合うものだけが生物としては共存、共生できるわけです。

この共生は、日本文化の特徴ではあるけれども、ヨーロッパの特徴でもあり、黒川紀章氏の言うような日本の専売ではございません。私が強調したいことは、山口さんに賛成いたしますが、共生は日本の専売ではないということで、ナシヨナリズムを避けていただきたいということです。専売だとすると調和になるわけで、共生は調和ではない、調和を破ることによって多様性ができるということです。これと寛容性のどういふ突き合わせをするかというのは、これから話めて行きたいと思っております。

【かない・よしこ】長岡短期大学教員。フェミニズム、倫理学。著書に「ポストモダン・フェミニズム」(勁草書房) ほか。

【やまぐち・やすし】立命館大学教員。政治学。著書に「現代ヨーロッパ政治史」他。

【わだ・はるき】東京大学教員。歴史学。著書に「マルクス・エンゲルスと革命ロシア」(勁草書房)、「朝鮮戦争」(岩波書店) ほか。

【よしかわ・ゆういち】市民の意見三〇の会・東京。著書に「市民運動の宿題」(思想の科学社) ほか。

【おおた・まさくに】ラテンアメリカ研究。著書に「千の日と夜の記憶」(現代企画室) ほか。

【かとう・てつろう】一橋大学教員。政治学。著書に「東欧革命と社会主義」(花伝社) ほか。

★話題の新聞	★話題の新聞	★最新新聞	★最新新聞
<p><b>ハイレク食品は危ない</b>                  「蝕まれる日本の食卓」フクロプレムQ&amp;A①                  天竺蒼祐著 ● バイオテクノロジーを使ってつくられた食品が増えている。バイオ食品は安全なのか? 一六〇〇円</p>	<p><b>天皇制に挑んだ一七〇〇人</b>                  「即位の礼」大嘗祭「遠慮訴訟」の記録                  即大いけん訴訟団編著 ● 裁判所をして政教分離原則違反の疑いありと言わせた訴訟の全記録 二四〇〇円</p>	<p><b>全国監獄実態 (増補新装版)</b>                  監獄法改悪とたたかう獄中者の会編著 ● 獄中で書き下し全国の監獄実態を初めて明らかにした衝撃の書に、処遇の更なる変遷・化の実態を加筆 二五〇〇円</p>	<p><b>ドキュメント日本の公害 13</b> アジアの環境                  川名英之著 ● 現代日本の公害のドキュメント通史、ついに完結! 公害輸出国日本とアジアの自然・環境破壊を追う。総索引付 三〇〇円 (全13巻揃え五〇二二五円)</p>
<p>【価税別】 <b>緑風出版</b> 〒113文京区本郷1-8-3 桜ビル1F ☎03(3812)9420 振替00100-9-30776</p>			